

出会いはタカラモノ

子どもから教えられたことばかり

第3回 折り合いをつける力



佐藤比呂二

さとう ひろじ／東京都生まれ。特別支援学校教員。編著書に『ホントのねがいをつかむ—自閉症児を育む実践』（全障研出版部）など。

物を壊しては「ごめんなせう」と書き続ける

ソウちゃんこと宗市朗君（知的障害、自閉症）が転校してきたのは中3の5月の終わり頃でした。前籍校からの資料には「発語はないが、文字を書いて簡単なコミュニケーションがとれる。音楽鑑賞が好きでオルガンで何曲か弾くこともできる」等の実態の他、いわゆる問題行動として「パニックになると身の回りの物を壊す」とありました。特に「教員のメガネには要注意」とのこと。まあ、そうは言ってもかかわって見ないことにはわからないよなと思いつつ初日を迎えました。緊張した面持ちのソウちゃんでしたが、グラウンドに出て朝の体操が始まると手足をピンと伸ばし全身を躍動させ始めました。生真面目さが伝わってきます。登校初日のソウちゃんにとって、手本になる教員がいる体操はやるべきことがわかりやすかったのですが、「休憩」になった途端（これか

らなにやるのだろうか？）と不安が一気に高まったようです。私の顔を上目遣いでじっと見つめるとメガネを取ろうとスーッと手を伸ばしてきました。仮に素早い動きだったら反射的に止めていたでしょう。でも、このときはゆっくりだったのです。「メガネには要注意」という引き継ぎが脳裏をかすめました。渡したらどうするか。渡してみないとわからないよな）と思い「どうぞ」と渡してみました。すると、まるでタオルを揉み洗うかのように、両手でメガネをクチュクチュッと動かしたかと思ったら、あつという間にフレームはバラバラになっていました。（いかん。パニックだ）と思い、両手を押さえ誰もいない教室へ連れて行きました。静かな環境で落ち着かせようと思っただものの、教室に入るなり私のTシャツにつかみかかり破いてしまいました。私は仕方なくTシャツを脱ぎ、ソウちゃんに「破いていいよ」と渡してみました。すると（これもも

う破かない！）とばかりにポーンと投げ捨て、ダツと私に走り寄るとズボンを一気に引き裂きました。ジャージがまるでチャイナドレスのようです。次にラジカセを壊そうとするのを必死に止め、汗だくになりながら1時間近く揉み合っていたでしょう。ようやく落ち着くとノートに向かいなにやら書き始めました。「メガネ、だめ。ごめんなさい。ガラス、だめ。ごめんなさい」

うなだれて何度も書き続けるその姿は痛々しく見ていて切なくなりました。これまでに物を壊しては「ごめんなさい」とどれだけ書き続けてきたのでしょうか。そのたびに自己肯定感を削り取ってきたのかと思うと（ごめんなさいと書かなくていい生活にしたいね）って心のなかで声をかけました。

キーワードは「折り合いをつける力」

ソウちゃんがパニックになるとき、それは「自分の気持ち」に相反する「現実」や「相手の気持ち」にぶつかったときです。たとえば、（休み時間は好きなCDを聴こう）と決めていたのにラジカセが故障中で聴けない、先生に「ジュース飲みたい」と書いて伝えたのに水しかもらえない、こういうったとき瞬時にパニックになりメガネを壊そうとします。パニックになる前に少しでもやりとりができた方がいいのに。そして、お互いに譲り合いながら落とすところを見つけていけたらいいのに。それがソウちゃんの生きづらさの根にあると感じました。

ちょうどこの頃、愛知の竹澤清先生にソウちゃんの話を開

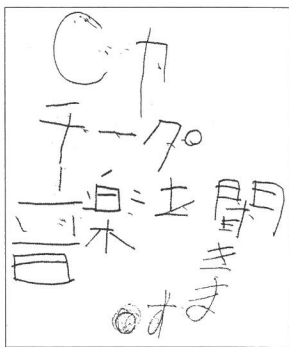
いてもらいました。そのとき竹澤先生が、中心的課題は「折り合いをつける力」だと言語化してくださいました。ソウちゃんとかかわる上で、最も重きをおくべきキーワードになりました。

ありのまま受け止める、しかし、受け入れるとは区別する

人はどうすれば「折り合いをつける力」を身に付けることができるのでしょうか。白石正久さん（元龍谷大学）の講演会で次のような話をうかがうことができました。

「自他のぶつかり合いの場面において、子どもに働きかける原則は、×印のジェスチャーをしたり、×印の絵をみせることではありません。まずは子どもの思いを受け止めること。（受け止める）ことは（受け入れる）こととはちがいます。（わかろうとすること）であり（言うことを聞いてあげる）ことではないのです」

先にあげた例で言えば、「音楽を聴きたいよね」とまずは気持ちちをありのまま受け止めます。その上でどこまで受け入れられるのか、受け入れられないのか、折り合いをつけるためのプロセスを大事にするのです。「ラジカセが故障して聴けないんだよ」と受け入れられない場合もあれば、「故障してないラジ



▲「CDテープ音楽を聞きます」